

「心のままに楽しむ保育」への心の変化

肥後雅代

(保育士)

最近、「肥後さん、楽しそうだね」とか「保育を楽しんでいるね」と、他の保育士から言われることが増えました。実際に私自身、毎日の保育がとても楽しいのです。

私はこれまで九年間、常勤保育士として働いていました。その後、今の職場で非常勤に変わり、現在二年目になります。常勤として保育をしていたとき、タイトルのように「心のままに楽しむ」ことが難しいと感じていました。常勤であるという気負いからか、どうしても先の活動のことを考えてしまったり、一人の子の遊びが長引くと、その子に付き合

いながらも他の子のことが気になって気持ちがそわそわしてしまったり、ということがたびたびでした。しかし、この一年では、先々の活動のための今ではなく、この瞬間瞬間を大切にしよう、大切にしたいのだ、という気持ちに変わっていききました。

見方が大きく変わったことの一つが製作活動です。以前は、雨天で外に出られない日に展開する活動というイメージが私の中では強かったのですが、晴れている日も、戸外遊びの前後に積極的に製作活動を行うようになりました。製作や描画のような表現活動が戸外

肥後雅代（ひごまさよ）

認可保育園で6年、お茶の水女子大学附属いずみナーサリーで3年、常勤保育士として勤務。現在は、同ナーサリー非常勤保育士。

の活動とどんなふうにつながり、何をどのよう
に表現するかを楽しみにするような、おほ
らかで柔軟性のある見通しを持つこともでき
るようになった気がします。

春はタンポポ摘み、夏は水遊び、秋は落ち
葉遊び、冬は雪遊びなど、楽しさが積み重な
ったときの製作活動では、目を輝かせて夢中
になっている子どもたちの姿がありました。
気持ち良さそうに腕をいっぱい伸ばして描い
ている姿や黙々と粘土をこねる姿を見ている
と、子どもたちの心の中がのぞき見えるよう



なうれしさを感じることがしばしばあります。
製作活動では形にすることをつい目指して
しまいがちですが、最終的な形よりも、その
工程でどれだけ子どもが動き、表現でき
たかが大事なのだと改めて感じました。

全身で丸ごと受けとめる

非常勤一年目の二〇一五年度は、常勤保育
士のNさん、非常勤のSさんと私の三人で、
一、二歳児クラスを受け持つことになりました。
前年度は常勤保育士として〇歳児クラス
の担任だったので、一歳児になった同じ子た
ちを持ち上がりで見ることになったというこ
とです。持ち上がりとはいええ、非常勤として
のかかわりは初めてのことなので、保育計画
を読み、子どもの顔を思い浮かべながら考え
るものの、どのように担任をサポートしたら
よいのか、迷うところもありました。しかし、

全身で気持ちを表現したり、全力で遊ぶ子どもたちの姿を見ているうちに、「ああ、そういうことか」と気付きました。

同じクラスを受け持っているSさんは、柔らかな草原で、力有り余る三歳の男児とお相撲を取っていました。彼女のその姿を見て、保育について頭の中で考えるより、とにかく全身で受けとめようと思いました。それから、初めてお相撲も取ってみました。子どもたちと全力で走って草原にゴローンと寝転がってみたり。今までの私なら、「いいのかな?」と思うことも、大胆に、子どもと大笑いしながらやってみました。体の小さい私は、三歳の男の子が不意にドーンと背中飛びついてくると、よろめくことが多々ありました。それでも、「体も気持ちもドーンとぶつけてきてね」という気持ちでいました。心の底から笑い合ったり、モヤモヤした気持ちを吹き飛ばすように全速力で風のように走り回ったり、

一休みしたいときに草原に寝転んでぼーっとしたり。学生の頃から「子どもに寄り添うことの大切さ」を教科書で習ってきましたが、このような時間を共に過ごすことの積み重ねが「子どもに寄り添う」ことなのかなと、初めて心の底から思えました。



働き方を変えて

先に述べた通り、私は、現在の職場に勤務した当初は、常勤保育士でした。職場の特徴である「日数選択型」(週のうちの登園する曜日と回数を選べる)の保育では、日々の登園するメンバーや人数が異なります。そのため、どのようにしたら子どもたちが同じように経験を積み重ねて、仲が深まり、遊びが広がっていくだろうかと模索し、悩む日々でした。

また、家に帰ればまだ幼い子どもがいたので、寝かし付けてから仕事の続きをやらうと思っても、なかなか寝付かず、イライラして泣かせてしまったこともありました。子どもの体調が優れないと、仕事でも考えてしまったり……。そんな、どっち付かずで何一つ満足にできず、揺らいでいる私を見かねて、主任の先生が話し合いの場を設けてくださいました。一度、非常勤で一步引いて見てみるのもいいのではないかと、また違ったものが見えて、将来子どもが大きくなって常勤として働くことがあったときにきつと役に立つから、とおっしゃってくださいました。

その言葉で、気持ちがあがうつと軽くなり、自分の器量や生活に合った仕事の仕方を前向きに考え直してみようと思えました。常勤を退くことへの不安も正直ありましたが、非常勤として仕事を始めてみると、保育への向き

合い方が変わり、新たに覚えてくることや得るものも多いことを実感しました。

昨年の三月、年度最後の職員会議の際に、常勤保育士のNさんから、「うまく支えてくれた。本当に助けてもらった。ありがとう」と言っていたきました。私は、以前自分が常勤だったときに、当時非常勤のHさんにたくさん助けていただき、支えられていました。非常勤になったとき、Hさんが私にしてくれたようにやろうと決めていたので、Nさんからの言葉は本当にうれしいものでした。

これからも、子どもたちの笑顔や仲間の言葉に励まされながら、毎日の保育を心のままに楽しんでいきたいと思えます。

